「最後の初恋」

鬼魅紡葉

二〇一一年一一月二日。
一年後。どうかこの日、彼に届きますように。

一月の夜はとても寒かった。冬って感じがするのは十二月とかなんだけど、それよりきっとずっと寒い。一人暮らしを始めて二年目、僕は寒空の下コンビニに夜食を買いに出かけた。もう慣れっこになった夜中の駅前の大通り。そして家に帰って、また絶望するんだ。真っ白のパソコン画面に向き合って。

趣味で書き続けている小説、あんなに浮かんでいた物語さえも書けなくなってしまった今の自分。今の僕には書くことがないんだ。小説を書き始めたころ、とにかく書きたかった。わけもなく書かなきゃいられなかったんだ。それがどうだろうか、いつの間にか自分が何をやってるのかもわからなくなって、時間に追われる毎日。そうだ、明日も学校があるのにこんな時間になにやってるんだか。

深夜の駅前通りは、静かなもんだ。たまに声が聞こえたと思えば、それは自分と同じように深夜の駅前を通りすぎる人の声であり、また自分と同じ大学生たちのストリートライブであり、楽しそうに会話する話声であり。こんな変化のない毎日がずっと流れ続けてる。

小説が書けなくなってから、僕は日記を書くようになった。ブログでもやればいいと思うかもしれないが、ブログではなく日記を書いていた。それはいつも持ち歩ける小さいノートでいつも鞄のポケットに入っていた。書けなくてもいいから、せめて心が感じたことを文字に起こしておきたいと思ったからだ。授業中や、バイトの手が空いたとき、ちまちまと書きたされていくそれは、いつの間にかノートの半分以上を埋めている。

それが、あんなことで自分の運命を変える存在になってしまうなんて……。

いつもの深夜の駅前通りのはずだったが、僕にはぼやけて見えていた。寝ぼけて出てきてしまったせいか視力が悪いくせに眼鏡を忘れたんだ。けれど、見慣れた道だから今さら困ることもないだろうと思って、取りに帰ることはしなかった。

しかし、それは間違いだと数分後に気づく。駅前の横断歩道を渡ろうと思った時だった。

「いっっ！！」　思わず悲鳴を上げてしまった。なぜかって？　ひざ裏に激痛が走ったからだ。何事だと思って振り向く。後ろには無表情の少女の姿。わけがわからない。

「ごめんなさい、自殺の邪魔をしちゃったかしら？」

彼女は腕を組みながら表情を変えずにそういった。そこで、ことの経緯を理解する。この自分と同年代であろう少女が僕に蹴りをかましたんだ。

「ちょっと君、見ず知らずの人に蹴りを入れるなんて酔っぱらっていたとしても許されないぞ。どういうつもりだ」

僕の言葉を聞いた少女は、心底嫌そうな顔をした。なんて常識のなってない女なんだ！無性に腹が立ってきてつかみかかろうとした時、もう一度突き飛ばされた。
「あんた前向いて歩いたら？　それともこの私に自殺現場を見せるつもりだったの？」
ふと意識を戻すと、目の前を通り過ぎる大型トラック。
ああ、いつまでぼんやりしてるんだ。
考え事をし始めると他のことが見えなくなるのが昔からの悪い癖だった。そして、そんな僕をこの少女は暴力的ながらも助けてくれたんだ。
「その……ありがとうな」、とお礼を言いながら尻餅をついていた僕は立ち上がろうとしたが、すぐに彼方の方向を向いた彼女からの言葉が突き刺さった。
「私にかまわないで。目障りだからさっさとここから立ち去ってください」
その気迫に言い返せるわけもなく、僕は黙ってすたこらと立ち去った。
今日はついてないよ……。

次の日もいつも通りの朝が来た。いつものように自転車で学校に行き、いつも通りの日常。今日は大学のメインストリートで痴話喧嘩しているカップルを見た。男女の感情に賞味期限は付き物、とか思いながら鞄のポケットに手を伸ばす。
あれ？　ない。
本当に今日はついてないよ。
きっと昨日の夜中、コンビニに行ったあの時が原因だ。あの少女に突き飛ばされてこけたとき、落ちてそのまま置いてきてしまったんだろう。なくしてしまったのは正直痛い、例えるなら何年も書き溜めていた小説のデータが消えてしまったようなものだ。
まあ、でも仕方ないか。取りに戻ったところであんなに小さいものが人通りの多い駅前で同じ場所に落ちている可能性も少ないだろうし、どうせ風で飛ばされてなくなってるのがオチだ。もう一度口論しているカップルに目を移して、ぼんやり眺めながら足を進めた。
今日は、もう帰ろう。

一人暮らしは、慣れてみれば快適だった。駅前ということもあり、遊びにも事欠くこともなく、生活するにも便利。寂しいと思うこともそれほどなく、たまに人の作った料理が食べたいなと思うぐらいで。見慣れた自分の部屋の前、ちゃっちいルームキーを鍵穴に差し込み、ドアを開ける。
カランカラン……。
ドアを引いたところで気づく、ドアについている郵便受けからなる音に。表札も出てない自分の部屋は、親しい人しか知らないはずだ。しかし、親しい人なら直接メールするなり電話するなりするだろう。わざわざ郵便受けに入れる理由はない。こっちに越してきて郵便受けを開けたことは何回ぐらいあっただろうか…とか考えながら開ける。
パタっと落ちる見慣れた、なくしたはずのノート。
これって……。思わず悲鳴をあげそうになった。なんで、郵便受けにこんなものが……。
このノートのことは自分しか知らないはず、親友にも誰にも話したことなんてない。それが、郵便受けに。気味悪くないわけがない。
それから何を思ったのか僕は、そのノートを抱えてあわてて部屋に滑り込み、大急ぎでベッドに座って、ノートを開いた。

１月２５日　曇天、明日は雪が降るらしい。泣き出しそうな空は、まるで何かにおびえる少女のようだ。

１月２５日、一昨日の日記だ。これは自分が書いたものに間違いない。
そして、ページをめくる。１月２６日。これは昨日の日付である、しかし昨日僕は日記を書いた覚えはない。

１月２６日　ずいぶんと面白い日記を書いているのですね。読んでいて笑いが止まらなくなりました。あなたはロマンチストなんですね。そして、くだらないことで悩んでるんですね。あ、そうそう。昨日助けてあげたんだからとりあえずお礼がほしいです。お金と言いたいところですが、私はお金より暇をつぶしたいです。私と交換日記をしてください。あなたに拒否権はありません。分かったら、駅前の公園のベンチの上にノートを置いといてください。それと、私はストーカーじゃありません。自分でノートの内容を読み返してみなさい、住所、住居、こと細かく書いてますよ。では、また。

人間嫌な予感ほど当たるとはまさにこのことだろう。あのノートはどうやら少女に拾われていたらしい。そして、少女はここまでわざわざ届けに来て、僕にお礼を要求している。
交換日記などという、小学生の女子が喜びそうなことを。
しかし、次の日僕は律儀にノートを駅前の公園のベンチに置いた。お礼とかそういうつもりではなくて、ただ単に面白いと思ったからである。昨日一晩、よくよく考えてみた。見ず知らずの少女と交換日記。面白くないはずがない。確かに気味悪いとか、あんな暴力少女とか、思うことは多々あるけれど、それを差し引いてもパターン化しつつある日常にとっては新しい風であることは間違いなかった。

そして、この日から少女と僕の奇妙なやり取りが始まった。

『君に蹴られた膝裏がとても痛いです。助けてくれたことは感謝しています。でもあんなやり方はひどいでしょう？』

『男性に触れたくなかったんです。男性と関わりたくなかったんです。けれど、自殺現場の目撃者になるのはもっと嫌でした。それより、あなたは小説を書いているんですね。ぜひ、読ませてほしいです。あなたの日記は面白いからきっと小説も面白いと、私思うんです。』

『僕はもう書いていないよ、いや正確には書けていないんだ。忙しい日々にかまけているのかもしれないけれど、書く言葉が思い浮かばなくて書く気にもならなくて、書こう書こうとパソコンを立ち上げてはネットサーフィンをする、今じゃそんな毎日です。』

『じゃあ、昔の作品を読ませてほしいです。私、ちょっといろいろあって、世界がいつも灰色に見えるんです。でも小説を読んでいる時だけ、私の世界は虹色。こんなくだらない世界なのにね、小説書きさんならこのくだらない世界をどう表現するのかなって。小説書きさんが恋をしたのなら、どういう風に言葉にするのかなって。きっと素敵なんでしょうね。考えただけでドキドキします。』

彼女とのやり取りはこうやって続いて行った。昔書いたくだらない恋愛小説をねだられしかたなくデータを渡した時もあれば、雨の日は家の前まで交換日記一つを取りに来たこともあった。もちろん顔を合わせたわけではないけど。そうやって、他愛無いやり取りを続ける中、一つ疑問に思うことがあった。僕は彼女のことを何もしらなくて、彼女も僕のことは知らない。お互いの名前すらも。

『突然なんだけど、君はどうして僕の居場所を知っているのに会って話さないの？　僕は君のことを何も知らないし、君だって知らないはずだ。交換日記なんて不安定なもの以外にも連絡を取る手段はあるのにどうして日記にこだわるの？　君はどこの誰？』

いつからだろうか、そこにいると分かっているのに言葉を交わせないことをもどかしく感じ始めたのは。もっと知りたい、もっと話したい、僕の書いた話を面白いって言ってくれたたった一人の人。会って話がしたくなって、それを考え始めるとまた悪い癖が始まって、気が付けば彼女のことばかり考えてしまうようになっていった。

外は相変わらず寒い、けれどもうすぐ春が来る。彼女に蹴り飛ばされた日から始まった不思議なやり取りはもう2か月近く続いていた。

『どうしたんですか？突　然質問責めされても困ります。それに、女は秘密がある方が魅力的なんですよ。メールしますか？　でも、メールなんてロマンチックじゃないでしょ。私はあんまり好きじゃないな。だから、交換日記がいいです。それより、またあなたの小説を読みました。まっすぐな恋心が流れるように伝わってきて、ドキドキしました。恋って素敵なんですね。もっと書いてほしいです。また、新作書いてください。私はあなたの書く物語がとっても好きです』

まるで人の話なんか聞きやしない、マイペースな彼女らしい返事が返ってきた。最初の頃だったら腹を立てていたであろう彼女の人をおちょくるような文章も、心地いいとさえ感じ始めている。まったくもって重症だ。そして僕も、あえて彼女のことは聞かなかった。そりゃ知りたいことだってたくさんあるけれど、こういうやり取りも面白くていいんじゃないかなと思ったから。

そうして四月。

人込みを避けるように道なき道を歩いていく。あまりの雑踏に眩暈がする。昼間に外を出歩くことがあまりなかったからというのもあるかも知れないけれど、人込みは避けて生きてきたから、

そんな私にとって4月のキャンバスは地獄にしか見えない。
あちこちで飛び交う部活勧誘の声と、不用意に道を塞がれる理不尽さ。全員殴り倒してやろうかなんて思いながら、できるだけ人のいない場所を俯きながら早足に歩いていく。そんな折だった。
「いたっ」　「いってぇ…あ、おまえ！」
あの、今にも雪が降りそうな夜、私が蹴り飛ばした男が目の前にいた。私よりずっと大きくて、私よりずっと大人で、私よりずっと色っぽくて。
「ご、ごめんなさい、というか前ぐらい見て歩きなさいよ！！」
とっさに出てしまった、いつもの口の悪い発言。駄目だ。一目見て思った、駄目だ。彼に会いたいかと聞かれたら会いたかった。気にならないわけがなかった。私にとって世界は本当につまらないもので、けれど彼の書いた小説は本当にそのつまらない世界が楽しそうに描かれていたから。どんな人が書いてるのかちゃんと見たかった。暗がりではしっかり姿を見ることはできなくて、そのまま続いていた交流。まさか、こんなところで転機が訪れるなんて……。
そして、想像していた姿とはずいぶん違った彼。動揺を隠せないでいた。恋にあこがれていたのは事実だけれど、私は、恋をしたくはなかった。いや、してはいけないんだ。

「あれ？なに、あの子知り合いなの？」「やるじゃん風折、新学期そうそう女の子とフラグかよ」
後ろで三人ぐらいの男子学生の声が聞こえた。彼は、風折っていうんだ。大きくて怖いけど、すごく大人の雰囲気が漂ってて、ちょっぴり煙草の匂いがする。
ふと振り返って、もうそこにいないことを確認。同時に。早鐘を打つ心臓。まだ恋はしたくない、なんて言い聞かせたところで言うことを聞いてくれるほど心ってものは単純じゃないんだ。どこかの誰かが、恋はこの世で一番厄介な病気だって言ってたけど、きっとそれは当たってるよ。

私は、生まれてこの方恋をしたことがない。好きな人が出来なかったとか、出会いがなかったとか、そんな理由ではなくて、恋をしないように努力していたんだ。異性とは関わらないように、人にも関わらないように。でも、人の恋の話を聞くのは楽しくて仕方ない。だから、知り合いもまともにいなかった私の楽しみは恋愛小説を読むことだった。今年から大学生になってこっちに越してきて一番、あんなことが起こるなんて。でも、彼に興味を持ってしまったのは否定できない事実。
ああ、春なんて来なければよかったのに。ずっと暗い冬で私の世界はよかったのに。
どうして、現実世界までカラフルに見えてるんだろう……。

学校に行くのも怖くなって、誰にも会いたくなくなって、それでも会いたくて。一目見ただけじゃないか、彼のことは何も知らない。とってもまっすぐな小説を書く人、大きくてそれでいて優しそうで面白い日記を書いていて、私の交換日記の相手で。そこまで思い浮かべて突然悲しくなった。先がない恋をなぜするのか。意味がないと分かっているのにどうしてこんなに意味もなく気になるのか。
「ねえ？　体調悪そうだけど大丈夫？」「……え？」
突然かけられた声。一人の女の人が私に話しかけていたみたいだ。周りを見回すと誰もいない教室で一人ぼんやりしている私。はたから見ればおかしい人か。

「いえ、別に何でもありません。少し考え事していただけです」
とっさに人を突き放す発言、いつものことだ。こうやって人を寄せ付けないように生きてきた。
「え？　どうしたのよ。あ、わかった。まあいいや……。こんなところでぼんやりしてたら風邪をひいてしまうわ。まだ寒いんだから」
目を合わせないように、逃げるように立ち去ろうとした私の左手に温かいものが触れた。前へ進もうとしても進めない。
「ちょっと待ってよ。私と一緒に遊びに行かない？　今日、カラオケに誘われちゃってさ。けど一緒に行く女の子いなくて。それに、悩み事があるのなら叫んでぱっとしちゃおうよ」
私の手を引いて歩き出す女の人。小春という名前の彼女は私と同級生だけど、ずっとずっとお姉さんに感じるような人だった。
手を引かれて歩き出す私。もちろん無表情。面倒事に巻き込まれなければ基本何でもいいけど、人との深いかかわりはできるだけ避けたい。そんな私の気持ちなんてまるで無視で。

手を引かれて5分もしないうちに待ち合わせ場所には到着した。まだ冷える四月初めの空の下、嫌な胸騒ぎだけが先走っていた。怖い、なぜかは分からないけどそう思う。
その理由はすぐにわかることになったけど。
目の前にいるのは彼じゃないか、交換日記の彼。どうして、神様はいたずらばかりするんだろうか。私には、まだやりたいこともあるし、こんなところで終わりたくはない。
「なあ……おまえさぁ……」
「ち、違う。あなたはそういうのじゃないの。ごめんなさい、帰りますっ」
「ちょっと待って。いきなりどうしたの、来たばっかりじゃない！！」
あわてて走り去ろうとする私の腕を小春がつかんだ。腕をつかまれた瞬間、涙があふれる。こんなことしたくなかった。恋なんてしたくなかった。恋をしたら、その恋はきっと人生で最後の恋になるから。
そんな私の様子を伺っていた小春は、「ちょっと待ってて」と私を少し離れた場所に連れて行くと、集まっていた人たちに了解をとって戻ってきた。
「何でも聞くから、わけありなんでしょ？言ってみなさい」
寒かったけど、私たちはホットココアを飲みながら公園でいろいろ話した。私が恋を拒絶する理由も、私が人と関わりを避ける理由も、それがどうしようもないことも。彼が気になることも、全部全部。何時間経っただろう、明るかった空には星が浮かんでいる。
サクサクと土を踏む音。ずいぶんの時間、私と小春がベンチに座りながら砂を蹴る音だけが響いていた公園に、新しい音が聞こえる。
「ほら、お迎えが来たわよ。私は、朱里が思うようにすればいいと思う」それだけ言って小春は立ち上がった。私もつられて立ち上がる。目線をあげると彼が立っていた。あれだけ話したけれど、やっぱりすぐに結論はでなくて、どうしていいかわからず小春の影にとっさに隠れる。そんな私には構うことなく近づいてくる彼。
「ほらよ、もう十二時まわってる。帰ろう」
差し出されたのは、しばらく止まっていた交換日記。交換日記と彼の顔を交互に見比べる。まだ、交換日記をしようということなのだろうか？　嬉しいのか嬉しくないのか、わからない。だけど、その一冊のノートを私はぎゅっと握りしめた。この時、心の中で覚悟が決まったのかもし

れない。

帰ってすぐにノートを開いた。

「まさか大学で出会うとは思っていませんでした。入学おめでとう。僕は風折隼人といいます。一応、こう見えても2年生です。驚かせてしまったみたいでごめんなさい。君のイメージは雪が降りそうな夜のイメージしかなかったけど、この前会ったときは少し違ったかな。小さくて、白くて、まるで雪のようでした。変な例えかな？　そうそう、小説また書き始めました。期待されると調子に乗るタイプなんで。順調に筆は進んでいます。できれば、ちゃんと話したいです」

小さなノートを何回も読み返して、読んでいるだけなのに心臓がドキドキと脈打つのを感じた。ノートにはメッセージと小さな名刺が挟まっていて、それと一言。また、見かけたらその時でいいのでノート渡してください。待ってます。

今度いつ会うのかもわからないのに、会えるかもわからないのに、慌てて机に向かってノートを開く私がいる。

「お久しぶりです。ずっと弱々しいイメージだったのに、思ってたよりあなたはずっと大きかったです。この前はごめんなさい、どう接していいのかわからなかったんです。私ももっとお話ししたいです……」ここまで書いて手が止まる。何を書いているんだろうか、本当にこれでいいのか。考え始めたら止まらない。それでも……「恋愛小説ですか？　とっても読みたいです。こんど読ませてくださいね。私は篠原朱里と申します。ここから電車を乗り継いで4時間、そんなところに住んでいます。今は下宿です。趣味は……」それでも、書きたかった。もう、覚悟は決まった。最後でいい、この恋を楽しもう。

週一日、同じ授業をとっていたから、最初はそこから話をするようになった。挨拶するだけだったのが、気づいたら隣で講義を受けるようになって、気づいたら一緒にご飯を食べるようになって。週に一日しか会わなかったサイクルも二日三日と増えて、お互いに数えきれないほど話して、たくさんの時間を共有して……。

交換日記はずっと続いたままだ。内容は、どんどん落書き帳になっていった。最初の頃こそ真面目に文字を書いていたものの、最近は「レポート書きました？　私は書いてないよ。」「ギリギリでも出せば正義」とかのただの伝言板、余白には大量の落書き。おそろいの耳飾り買って、友達もいっぱい作った。怯えて生きてきた人生、彼に出会ってふっ切れた。これでいいんだ。もし、これで終わりが近づいたとしても私は絶対に後悔しない自信がある、それほどに楽しい毎日だったから。灰色だった世界は、まるで彼の書いた小説の中みたいに、今の私の目にはちゃんとカラフルに写っている。そうやって繰り返されていく、私たちにしかわからない二人のやり取りがしばらく続いたある日のこと。

「明日の放課後、いつもの教室で。」

いつものくだらない落書きの隅に書かれた言葉。いまさら待ち合わせして会う必要があるのだろうか、なんて思いながら明日はどの服を着て行こうか、どの髪飾りを付けて行こうかなんて考えて踊りだす心。会えば話をするといった感じだったから、ちゃんと待ち合わせしたことはそう

いえばなかったな、とか思いながら。

「……よっ」

「よっ！！」

何を緊張しているんだろうか。放課後の誰もいなくなった大教室は、沈みかけた太陽が差し込んで窓の形を教室に移していて、とても綺麗だ。窓の外の飾り木の影が揺れるたびに、影も同じようにゆらゆらと揺れた。なんて言ったらいいのかわからないけど、宝石みたいに私には見えた。

「どうしたの？いきなり改まった呼び出しして。いつもみたいにご飯食べながらじゃ嫌なの？」

「おう、ちゃんと話したかったからな。そのさ、お前はなんで俺といるわけ？　その……」

「それってどう答えてほしいの？」

「そうじゃなくて、その……、なんというか……」

「ちょ、ちょちょちょっと。どうしちゃったのよ？」

机に座っている私を追い詰めるように迫ってくる隼人さん。ただでさえ体が大きいのにその迫力に圧倒されそうだ。いつだったか、少し前までは私の方が強かったはずなのに今じゃ力関係は五分五分。でも、今の彼は少し弱っているように見えた。思わずおかしくなって笑い声をあげる。あんなに大きいのに、なんかかわいらしく見えて。

「ねぇ？　キスしようか？」

「……はぁ？」

動揺する姿がかわいらしく見えて、彼の首に手を回す。あ、ちょっと身長が違いすぎたか……。まるで、これじゃ子供と大人だ。それが無性に悔しくって、「ちょっとまってなさいよ」

そういうと後ろを向いていつもかけている眼鏡をとった。これで、少しはお姉さんに見えるでしょ？

それから、長い長いロづけ。人生で最初で最後のロづけ。生涯でたった一度のキス。

甘くも、酸っぱくもなく、彼の味がした。

二〇一二年　八月一五日

相変わらず暑い毎日です。今日は雷に叩き起こされました。神様が怒ってるよ、怒らせるようなことなんかしたんか？　そうそう、今日は一つ報告があって久しぶりに書きました。もう、日記を書くのはやめようと思います。僕は書くべきことを見つけることが出来ました。朱里が読みたいって言ってた小説、もうすぐ完成します。感想、聞かせてください。

書き終えてしばらく、朱里のことを思い出した。朱里と出会って1年ちょっと。去年の春僕は朱里と出会った。無邪気で人の話を聞かなくて、とてもかわいかった。僕は彼女のことが好きだった。けれど、結局あの長いキスのあと、想いを言葉にすることはできなかった。朱里はいつものように無邪気に振舞って、乗せられてはしゃいで、気づけば夜で……。

二〇一二年の世界に、篠原朱里は存在しない。

あの日、キスしたあの日の翌日、彼女は学校を辞めた。理由も行先も告げずに。小春に聞いた

話によるとどうしてもやりたいことができて、それに専念したいからだと。そう話ながら涙をぽろぽろと零す彼女を見て、そうかとだけ僕は返した。
彼女がひたすら恋に怯えていた理由、話してくれなかったから詳しくは知らないけれど“恋をしたら死んでしまう病気”彼女はそうとだけ教えてくれた。正確には、ホルモンの遺伝性の病気で大人になったら死んでしまう病気だった。
彼女が、キスをするとき。僕と話を交わし始めた日、何かを覚悟してたのは知っていた。初めて顔を合わせた時の戸惑ったような怯える表情も。

日記を書いていたペンを置いて、彼女とのやり取りを何度か見返して、そのノートを抱えて、あの教室に向かった。夏休みの誰もいない教室のいつもの席にそのノートを置いた。もう、返事は返ってくるはずがない。でも、ここに置くのが一番正しい気がしたから。
朱里、僕に出会ってくれてありがとう。

秋学期が始まり、夏休みの呆けた生活から一変、忙しい毎日が始まった。授業を受けて、バイトをして、小説を書いて……。相変わらず時間に流される毎日だ。だけど、今の僕にはやりたいこともあるし、なにより、朱里との約束がもう少しで果たせそうなのが嬉しかった。いつも通りの日常。今日は大学のメインストリートで痴話喧嘩しているカップルを見た。男女の感情に賞味期限は付き物、とか思いながら笑って通りすぎる。こんなところで喧嘩なんかするなよ。
家に帰って、ちゃっちい鍵を回して扉を開ける。

カランカラン。

郵便受けの中で何かが音を立てる。僕は不思議に思いながら郵便受けを開いた。
パタッ、と封筒が落ちる。宅配便……？
宅配便なんて心当たりが全くない。宛先を見てみると、“篠原朱里”と。もう存在しないはずの彼女からの宅配便、気味悪くないわけがない。僕は笑いながらその封筒を開けた。中身は僕たちのやり取りが詰まったあのノート。あの時から全く変わっていなかったけれど、一か所だけ違うところがあった。最後の一ページ。

『あの教室でこのノートを見つけました。もう来ないのに、誰かに見られたらどうするの？もう一度だけあの教室が見たくて戻ってみればこれです。それはおいといて。隼人さんの小説読みました。やっぱり隼人さんの小説すっごく面白いです。ヒロインが主人公にキスするシーンなんて最高ですね、こんなにまっすぐな小説、隼人さんしか書けないです。とっても面白かったよ。これからもずっと書き続けてください。絶対また読ませてくださいね！！』
朱里……僕の小説まだ完結してないよ。それになんで内容を知っているんだい？
笑いが止まらなかった、ノートは涙でぐしゃぐしゃだ。

朱里。とっても君らしい感想ありがとう。